乳幼児は絵本でどのように他者の心を理解していくのか

—母子の絵本読みあい場面への参与観察から—

高橋あかね

(淑徳大学大学院総合福祉研究科)

キーワード：乳幼児、絵本、心の理論

How do the infants understand the mind of others with a picture book?

—From the participant observation of the reading picture books scene of the mother and the child—

Akane TAKAHASHI

(Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Psychology Department, Shukutoku Univ.)

Key Words: infants, picture books, theory of mind

目 的

従来、4歳以前の人間の子どもは自己中心的な見方しかできず、他者の立場でものを考えたりすることはできないと言われてきた(門脇, 1999)。他者の心の状態を理解するための枠組みとして「心の理論(theory of mind)」という心的機制が想定されている。「心の理論」とは、他者の行動の背景にその行動とはとりあえず異なる「心」があり、その心が意図を持ち、気持ちを感じ、あれこれ考えるといったことが分かることを指す(無藤, 2002)。しかし、近年の研究では2, 3歳の子どもでも、他者の行動を理解し予測するために、意図や欲望や信念といった概念を用いることができる(Dupoux & Mehler, 1990 加藤・増茂訳 1997)とも言われている。このことから、乳幼児の他者理解の過程において、適当な媒体を用いることで、乳幼児の他者理解に関する特徴について知ることができるのではないだろうか。

以上をふまえて、本研究の目的は、乳幼児が、母親と絵本を読み合う体験を観察場面として、他者の心を理解するという「心の理論」を想定させるような表現をどのように示すのかという点について検討することである。その際、乳幼児の絵本遊びには、現実の経験を絵本によって再認(自分の経験を再び知覚すること)する過程が見られるのか、という点に注目して検討を行った。

方 法

知人の母子ら6組(0歳9ヶ月の男児、0歳10ヶ月の男児、1歳1ヶ月の女児、2歳1ヶ月の男児、2歳6ヶ月の女児、3歳3ヶ月の女児)を対象として参与観察を行った。対象者の自宅で5~10分程度、筆者が持参した新規の絵本と子どものお気に入りの絵本の合計2冊を母子で読み合う場面をビデオカメラで撮影した。新規の絵本は乳幼児の年齢等を考慮し、年齢別に異なる絵本を選定した。分析の対象となったデータは、母子のやりとりの映像と音声である。映像データについては、事前に特定の行動についてのチェックリストを作成し、それに基づいて絵本を読みあう母子の関わり方の特徴を抽出した。絵本の読み進め方や言動、発話内容を0~1歳児、2歳児、3歳児の3グループに区分した上で、逐語録や映像から観測された母子の言動のデータをパターンとカテゴリに分類する分析を行った。

結 果

0~1歳児グループの乳児は、個人差はあったものの、まだ言葉を話せないために、新規の絵本でもお気に入りの絵本でも、「絵本に触れる」という行為によって母親とコミュニケーションをし、絵本に関するやり取りを行っていた。一方、新規の絵本よりもお気に入りの絵本の方が、母親とのやり取りがスムーズで、母親が主導した読み合いを行うと、乳児は母親の言葉の意図を汲み取り、母親の問いかけに対して正しい応答や反応を見せていた。

2歳児グループの幼児は、新規の絵本を、お気に入りの絵本

よりも集中して見ていて、子どもの指しは少なく、母親が子どもの現実世界の体験と絵本の出来事を関連付けて、子どもの絵本理解を促すという特徴が見られた。一方、お気に入りの絵本場面での子どもは、挿絵や実物の玩具への指しや母親に質問することが増え、「注意-確認-共有」というパターンを用いながら、絵本内で子どもの現実世界の「再認」をしている特徴が見られた。

3歳児グループの幼児は、読んだ絵本2冊に共通して、小さな動物が怖い思いをしながらも活躍する話であったため、幼児自身が絵本の主人公や、その他のキャラクターにもなりきっていて、場面ごとに重要なキャラクターになりきる中で、他者の立場になりかわる体験をしていた。

考 察

0~1歳児の乳児は、前言語的なコミュニケーションにより絵本を読みあい、母親の指し示の意図を理解することに注意が向けられている。そのため、絵本世界と現実世界との関連付けや、絵本の登場人物と自分自身を同化することまではできなと考えられる。

乳児期で絵本の読み合いの過程を通して、母親の意図や注意、情動を汲み取る能力が備わった2歳児は、まず、自身を主体として絵本の中に登場させ、絵本内に現実世界と同じ世界を作り上げることで、他者の心を読み取ろうとしていると考えられる。また、2歳児は「再認作業」が頻繁に行われ、自身の気持ちにばかり関心が向いていた段階から、絵本と現実世界を行き来する経験へと発展し、自身の気持ちを整理できるようにしていく。さらに自己意識がより明確に区別される段階に入ると、友達などを含む他者理解の過程へと発展していくと考えられる。

3歳児は、自分になりきる登場人物を場面ごとに变化させており、登場人物の行動の背景にある心を汲み取ることが可能になっていると考えられる。

本研究の結果から、乳幼児期は、「注意を共有する過程」から、「他者の心を推測する過程」へと発展していく段階であると考えられる。また、こうした絵本の読み合いは、他者の心や意図、行動の背景を読み取る能力を育てることができ、他者の立場に立って物事を考えられるようになる「心の理論」の過程を築くために重要なかわりのひとつになりうると考えられる。

引用文献

- 門脇厚司(1999). 子どもの社会力 岩波書店
 無藤隆(2002). 自他についての理解の発達 内田伸子(編) 乳幼児心理学 放送大学教育振興会 pp. 111-119.
 Dupoux, E., & Mehler, J. (1990) *Naït re humain*. Editions Odile Jacob. (デュブー, E., & メレル, J. 加藤晴久・増茂和男(訳)(1997). 赤ちゃんは知っている—認知科学のフロンティア 藤原書店)